

P-27 p-53陽性を示した気管支扁平上皮化生の一例

○嘉村哲郎、平野 隆、柴沼弘行、大平達夫、岩淵 裕、日吉利光、山本秀樹、石井正憲、小中千守、加藤治文(外科第一講座)、芹澤博美(病院病理部)、海老原善郎(第二病理)

気管支扁平上皮化生は肺扁平上皮癌の前癌状態に成り得ると考えられている。我々はp-53蛋白発現を認めた気管支扁平上皮化生の一例を経験したので報告する。症例は61歳男性で検診による喀痰細胞診陽性(C判定)のため精査目的に来院した。気管支鏡にて得られた材料は中等度異型を伴った扁平上皮化生と診断され、p-53陽性、核DNA aneuploidyを示した。

当科では異型のない扁平上皮化生(4例)、軽度異型を伴った扁平上皮化生(12例)、中等度異型を伴った扁平上皮化生(15例)、早期扁平上皮癌(15例)、進行した扁平上皮癌(33例)における各々p-53・PCNA・核DNA aneuploidyについてその陽性率を比較検討した。また、それぞれの実験材料は全て気管支鏡あるいは手術で得られた検体を使用した。

p-53陽性は異型のない扁平上皮化生では0%(0/4)、軽度異型を伴った扁平上皮化生では0%(0/12)、中等度異型を伴った扁平上皮化生では7%(1/15)、早期扁平上皮癌では40%(6/15)、進行した扁平上皮癌では39%(13/33)であった。

PCNA陽性は異型のない扁平上皮化生では25%(1/4)、軽度異型を伴った扁平上皮化生では33%(4/12)、中等度異型を伴った扁平上皮化生では40%(6/15)、早期扁平上皮癌では87%(13/15)、進行した扁平上皮癌では91%(30/33)であった。

核DNA aneuploidyでは異型のない扁平上皮化生では0%(0/4)、軽度異型を伴った扁平上皮化生では8%(1/12)、中等度異型を伴った扁平上皮化生では33%(5/15)、早期扁平上皮癌では100%(15/15)、進行した扁平上皮癌では100%(33/33)であった。この結果より異型度が高い程p-53蛋白の発現を示し増殖能も高いことが示唆され、本症例の様な扁平上皮化生は癌への進行の可能性を強く示唆し厳重な経過観察が必要と考える。

P-28 唾液腺腫瘍性疾患に対するMRI

放射線医学教室

井上 真吾 朴 辰浩 新藤 博明
志村 容生 杉木 修治 石田 二郎
赤田 壮市 兼坂 直人 柿崎 大
阿部 公彦 網野 三郎

今回、我々は唾液腺の腫瘍性疾患に対するMRIの有用性を、retrospectiveに検討したので報告する。また、Dynamic studyを加え造影形態を評価することにより、鑑別診断が容易になったので合わせて報告する。対象は、八王子医療センターおよび東京医大病院において、手術あるいは生検により病理組織学的診断の確定した20症例である。撮影装置は、島津製1.0T(SMT-100X)および東芝製0.5T(MRT-50A)である。Dynamic studyは、9症例に施行し、得られた画像を、比較検討した。

腫瘍の信号強度からの鑑別は、多くの報告にあるように困難であったが、腺癌はT2強調像で強い低信号を示した。低信号の原因は、高い細胞密度や繊維化が原因になりうると考えられた。腫瘍境界の不明瞭さは腺癌に、多く認められたが、被膜のはっきりしないPleomorphic adenomaの1症例でも不明瞭であった。内部の均一性に関しては、ばらつきが多く鑑別には役立たなかった。腫瘍辺縁の分葉状(凹凸)像および厚い被膜構造は、Pleomorphic adenomaに比較的特徴的であった。Warthin's tumorは、耳下腺下極に存在し薄い被膜を有

しT1強調像で内容液がやや高信号を示す嚢胞をもつことが多かった。Dynamic像および造影像の検討により、強い造影効果を示す腫瘍(全例Pleomorphic adenoma)と辺縁を中心に造影効果を示す腺癌との鑑別は、可能と考えられたが、造影効果が乏しい場合、多種類の腫瘍が鑑別診断に入り、内部性状なども加味して診断する必要があると考えられた。また、Warthin's tumorは、造影効果が乏しく嚢胞性変化を示すことが多かった。

今回我々は、唾液腺腫瘍性疾患に対するMRIの有用性、特にDynamic studyを追加することにより診断能が向上するかどうかを検討したが、Dynamic studyは腫瘍の組織型にある程度の相関関係を示し、鑑別診断に有用だった。更に、症例を蓄積し検討を重ねていきたい。